**〔解　　説〕**寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十(たいじゅう)」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

**〔あらすじ〕**主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。光秀の母さつきは、主君を討った光秀を許さず、一人尼ヶ崎に転居するのですが、そこへ光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつした久吉が一夜の宿を乞うのでした。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。すると最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。十次郎は敗戦の様子を伝えて息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのでした。 (一般社団法人　義太夫協会発行)

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

**尼ヶ崎の段**

月漏る片庇

こゝに刈り取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現れ出でたる武智光秀

「必定、久吉このうちに忍びゐるこそ一。只一討ち」

と気は張り弓、心は藪垣の、見越しの竹をひっそぎ鑓。『小田のの啼くをば、めて敵に悟られじ』と、差し足抜き足窺ひ寄り、聞こゆる物音、『心得たり』と、突っ込むの鑓先に、『わっ』とる女の泣き声、『合点行かず』と引き出す手負ひ。真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒

「ヤア、こは母人か。ししたり。残念至極」

とばかりにて、さすがの武智も仰天し、たゞ呆然たるばかりなり。声聞き付けて駈け出る操、初菊もろとも走り出で

「ノウ母様か情ない。この有様は何事」

と縋り歎けば、目を見開き

「嘆くまい〳〵。内大臣春長といふ主君を害せし武智が一類、かくなり果つるは理の当然。系図正しき我が家を、逆賊非道に名をす、不孝者とも悪人とも、たとへがたなき人非人。不義の富貴は浮かべる雲。主君を討って功名顔。天子将軍になったとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立たば、のも、百万石に勝るぞや。おのれが心たゞ一つで、印は目前これを見よ。の命を絶つ、も多いにこのやうな、ひっそぎ竹の突き鑓。主を殺した天罰の報ひは親にもこの通り」

と、鑓の穂先に手をかけて、抉り苦しむ気丈の手負ひ。妻は涙にむせ返り

「コレ見給へ光秀殿。の門出にくれぐれも、お諌め申したその時に、思ひ止まって給はらば、かうした歎きはあるまいに、知らぬ事とは云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞ。せめて母御の御最期に、善心に立ち返ると、たった一言聞かしてたべ。拝むわいの」

と手を合はし、諌めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き。操の鑑曇りなき、涙に誠表せり。光秀は声荒らげ

「ヤアな諌言立て。の舌の根動かすな。遺恨を重ぬる小田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我が諌めを用ひずして、神社仏閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門の習ひ天下の為。討ち取ったるは我が器量。武王は殷の紂王を討つ。北條義時は帝を流し奉る。和漢ともに、の君をするは、民を休むる英傑の志。女の知る事ならず。りをらう」

と光秀が、一心変ぜぬ勇気の眼色、取り付く島もなかりけり

**〔解　　説〕**

安永九年（一七八〇）江戸外記座にて初演。紀上太郎、烏亭焉馬、容楊黛の合作による全十一段の時代物です。由比正雪の乱に、奥州白石であった姉妹の仇討ちの実話を絡ませた筋書きですが、仇討ち物なので時代を太平記の時代に置き換えています。七段目で姉妹が巡り会う「新吉原揚屋の段」は、姉妹の言葉使いの違いがおもしろく、芝居でも人気となり度々上演されています。

**〔あらすじ〕**

大黒屋の傾城宮城野は、大黒屋の亭主惣六が連れてきた田舎娘おのぶが故郷に残した妹だと気付き、二人きりになったところで母親が持たせた証拠を互いに見せ合い、再会を喜びます。しかし、おのぶの口から父母の死を聞き、妹とともに父の仇討ちを決意し、廓を抜けだそうとします。それを立ち聞きしていた惣六は、曽我兄弟の仇討ち物語を引き合いに出して二人を諫め、その時が来るまで待てと諭すのでした。

**新吉原揚屋の段**

入相の、鐘さへはやく、暮れはてゝ廓のうちは万灯会歌舞の菩薩の色揃へ、わけて全盛宮城野が部屋は上品奥二階、箪笥長持鏡台の、埃取りまで綾錦袱紗なりけるありさまなり

見やる宮城野おのぶが傍、『もしやそれぞ』と摺り寄つて

「さつきにからの話を聞けば、姉を尋ぬる人さうな、奥州はどこらの生まれ、なんといふ所ぢやえ」

「アイサア、奥州は白坂近在、逆井村といふ所」

「フウその逆井村といふ所に、与茂作といふお人があらうがの」

「アイサ、その与茂作といふのはめらしが父」

「ヤアそんならわしが妹」

と縋り寄るを突退けて

「イヤサ〳〵〳〵、母の常に言はしやるには、『姉さあの方にもしるしがある、それを証拠に名乗り合ひ、委細心底打明けろ』と言ひめした、それがあるなら早うつん出し、見せてくんせえ姉さあ」

と懐かしながら油断なき

「オヽ利口な人〳〵、疑やるも尤も」

と立つて箪笥の袋棚襖開けば恭しう、浅草寺の観世音、扉表具に押並べ、飾り置いたる筒守り見るに妹も疾し遅し首にかけまく壺井の守り

「コレ〳〵、この姉が国を出る時、母様が大事にせいと下さんしたこのお守り、父様は楠家のご浪人ゆゑ、河内の国壺井八幡様のお守り、それを持つてゐやるからは妹ぢや〳〵コレ、よう顔見せてたもいなう」

「オヽ姉さアでござるかいなう、会ひたかつた」

ともろともに、嬉し懐かし鎚り寄り、ほかに詞もなくばかり

「オヽ妹、よう尋ねて来てたもつたの、年端もいかぬそなた、父様なりと母様なりと、いづれぞ付いてお出でゞあらう、がもし道中ではぐれてか」

と、問はれて『わつ』と声を上げ

「アヽコレ〳〵かう巡り会ふからは、悲しい事も何にもない、泣いては済まぬ、サどうぞ」

と、尋ぬる姉の心もそゞろ

「エヽ遠国隔つた姉さあ、それで何にも聞かねえな、父は五月田植の時分、代官志賀台七という悪侍に」

「ヤア〳〵何と言やる」

「ぶつ斬られてお死にやり申した」

「ヒヤア」

とびつくり差込む癪

「アヽコレ姉様いの〳〵」

「アヽヽヽとつとモウ悪い時、そうしてどうぢやその後は」

「サア、なしよにもかしよにも俺だあけ一人、庄屋の伯父さアが引取つて、『奉公しろ』と言ひめすけど、何の奉公どころかい、口惜しいと、悔しいで、後先思はず、檀那寺へ駈込うで、阪東順礼すると言つて笈摺もらい、国元さアを突走つたも、そんだに尋ね合つたら、姉妹心を一致にし申いて、父の敵が討ちてへばつかり、道中すがらの艱難も、そんだに会ふが楽しみに、がいに、苦労とは思はなんだ、しかし会つたらかつぱりと、しよろつ骨が抜けたやうな、コレそれがいに歎かつしやる手間で、妹はるばる尋ねてよう来てくれた、めごいめらしと言ふてくんせい姉さあ」

と、あやも泣入る稚な気に長の旅路の憂き苦労、思ひやるせも宮城野に、続くは末の、松山を、袖に、波越す涙なり

歎きのうちも姉はなほ、妹が背を撫でおろし

「オ、そのやうに思やるも尤も、しかしそなたは父母に、長う添やつた身の果報、コレこの姉を見やいなう、年貢に迫つて父様は水牢、その苦を助けうばつかりに、コレこの廓へ身を売つたを、思ひ返せば十二の年、そなたは五つ子顔さへ見知らず父様のご最期や、母様の死に目にも会はぬといふ悲しい不孝な、はかない事があらうかいの、かうした事とは露知らず、この妹は健なか知らぬ、父様、母様、お煩ひでもあらうなら、よもや知らして給らうもの、便りのないを杖柱、首尾よう年季を勤めたら、国へ帰つてお二人に、楽させまして、どうしてと、色や浮気を嗜んで、勤め大事と許嫁の殿御の事も、そなたの事も、恋し懐かし思ふのを楽しみ暮した甲斐もなう、名乗り合うたは嬉しいが、悲しい話聞く姉が心も推してたもいの」

と、手を取交す姉妹が涙

涙を、立聞きも貰ひ泣きして立分の、暖簾も濡る、ばかりなり

**〔解　　説〕**安永元年（一七七二)大坂豊竹座初演。作者は竹本三郎兵衛、豊竹応律、八民平七。美しい人情を描いた世話物の代表作です。中でもお園のクドキ「今頃は半七様どこにどうしてござろうぞ」はよく知られている。元禄八年、大阪千日前での赤根屋（茜屋）の半七と美濃屋の三勝(さんかつ)が心中した事件が歌舞伎となり、二十五年を経た享保四年、紀海音が『笠屋三勝廿五年忌』という浄瑠璃を創作しました。その後更に笠屋を実説美濃屋にし、半兵衛やお園を配した『女舞剣紅楓』の筋を受け、発展させたものがこの作品です。上中下三巻に分かれ、下の巻の、「上塩町の段」が「酒屋の段」となります。

**〔あらすじ〕**大阪上塩町の酒屋「茜屋」に幼子を連れた女が酒を買いにあらわれ、子どもをおいて姿を消します。この店の息子半七は、お園という貞淑な女房がいるものの、以前から美濃屋の三勝という遊女となじみ、二人にはお通という子どももおりました。半七はふとした廓のいきさつで、人殺しの科人となってしまいます。、半七の父半兵衛は、一度は息子を勘当したものの、不憫に思い、代官所で息子の罪を引き受けて縄にかかります。

一方、お園の父宗岸は、半七の不行跡に愛想をつかし、一旦はお園を実家へ連れ戻したものの、お園が悲しみに沈んでばかりいるので、再び嫁として迎えてくれるように半兵衛に頼みに来ます。お園は夫に嫌われるのは己の至らなさからと、ひとり寂しく半七の身を案じます。そこへ置き去りにされた子どもが現れ、半七と三勝の娘お通であることがわかります。一同はお通の守り袋から出た書き置きを読み、半七と三勝の死の覚悟を知り、悲嘆の涙にくれます。二人は店の外でその様子をうかがい、万感の思いを残して去って行くのでした。

**酒屋の段**

こそはの

によりも、あたらをひとりの、をが、はぬに、丸いあたまの光りさへ、子ゆゑに暗む黄昏時。主の妻は灯をともし表を締めにいそ〳〵と、出ひ合頭に

「ホヽこれは〳〵様。そちらにゐやるはお園ぢやないか」

「アイ母様。お変りもござりませぬか」

とう挨拶もどこやらに疵持つ足の踏みどさへ、低き敷居も越えかぬる。宗岸は遠慮なく

「半兵衛殿お宿にか」

と娘を連れて打ちとほれば

「サア〳〵ずお上りなされませ」

ともなきのうち、それとよりが、をづるしぶ〳〵

「をなれたからは、こちのうちに用はない筈。何のためにござつたこと」

と針持つ詞に、妻は気の毒

「アヽコレイノコレ親父殿〳〵ホヽヽヽヽヽホヽ、イヤモ人様に云はぬ偏屈なこちの人。必ずお気にられて下さりますな、この間は嫁女の帰つてゐられまして、いかいお世話でござりませう」

「なんの〳〵。半兵衛殿の立腹は皆もつとも。とやらに心奪はれ、夜泊まり日泊まりして女房を嫌ふ半七。所詮末のつまらぬこと、無理に引つ立て去んだのは、娘にひけを取らすまいためおれが気迷ひ。それから思案するにつけ、もも一旦嫁にやつた娘。嫌はれうがどうせうが、男の方から追ひ出すまで、取り戻すといふ理屈はない筈。こりや宗岸が一生の仕損なひと、悔んでもあとの祭。園めも昼夜泣き悲しみ、も進まねば、もしや病が起こらうかと、見てゐる親の心は闇。おれも天満に年古う住んでゐれば、人に理屈も云ふ者なれど、誤りは詫びねばならぬと、年寄りの押しぬぐうて来ました。なにかのことは料簡して、今までのとほり嫁ぢやと思うて下され。コレ頼みます。頼みます御夫婦」

と謝り入つたる挨拶に、園もうぢ〳〵手をつかへ

「様の一徹で、無理に連れられ帰りしが、一旦殿御と極まつた半七様。嫌はれるは皆、私が不調法、鈍に生れたこの身の、今から随分お気に入るやうに致しませうほどに、やつぱり元の嫁娘とおつしやつて下さりませ。お二人様」

とあとは詞も涙なり

「オヽなんのマアそつちさへその心なら、こつちは変はらぬ嫁姑、ナウ親父殿さうぢやないか」

「イヤさうぢやない。昔唐にも例がある。とやらいう人の妻、夫に暇取り月日を経て詫び言に来たりし時、鉢の水を大地にあけさせ、その水を鉢へ入れよ。元のごとく夫婦にならんと、太公望が云はれたと、いつぞや講釈で聞いて来た。それと丁度同じこと。こなたの方から無理暇取って、今更嫁と思へとは、モヽヽヽいつまで云うても返らぬこと。口詞叩かずと、はやう連れて去なつしやれ、エヽ去なつしやれ」

とにべもしやくりも納戸口、顔を背けてゐたりける

「サヽヽヽその腹立ちは尤も〳〵。が重々不調法は、コヽこのあたまに免じて料簡して、どうぞ嫁に」

「嫌でござる。伜めは勘当したれば、嫁というベき者もない筈」

「サそれも懲らしめのため、当座の勘当」

「イヤ当座でない。までの勘当」

「ムヽそのまた七生まで勘当した半七が代りに、こなたなんで縄にかヽつた」

「ヤア」

「サア半七とは親でも子でもないこなたが、代官所でなんのために縛られて戻らつしやつた」

と思ひも寄らぬ宗岸が、詞にびつくり驚く女房。嫁もとも〴〵立寄って、肌押し脱がせば半兵衛が、小手をゆるめし締め

「ナウ情なや何ゆゑ」

と嫁はうろ〳〵、女房も取付き歎けば、宗岸が

「イヤ、まだ〳〵驚くことがある。婿の半七は人殺し、お尋ね者になつたはいの」

と聞くより二人はまたびつくり

「それはなにゆゑどうした訳。様子を聞かして、コレ半兵衛殿」

と問へどもさらに返答は、差しいて詞なし。宗岸涙の目をしばたヽき

「の晩山のロで善右衛門を殺したは、茜屋の半七と、噂を聞いた時は、驚くまいかびつくりせまいか。膝も腰も抜け果てしが、アヽ思へば〳〵不孝者。よい時に勘当さしやつて、親に難儀のかヽらぬは、まだこの上の仕合はせと、思うたは他人の了簡。違うこなたの縛り縄、科極まつた半七が命、一日なりと延ばしたいと、人殺しの科を身に引き受け、縄かヽつたこなたの心は、に子を思ふ親の誠と、知れば知るほど宗岸が仕損ひぢや。半七が身の難儀。こなたも勘当してしまひ、おれも娘を取り戻したら、親にかヽる首綱もなく、よいことしたと世間から、褒める人もあらうが、親となりとなるが、マヽヽ大抵深い縁かいなう。かういふ仕儀になつた時は、褒めらるヽより笑はれるが親の慈悲。もはやうと連れてきた心はの、一旦嫁におこしたれば、半七が嫌がるならハテ尼にしてなとこのうちで、御夫婦の亡き跡の、なりとも取らして下され。コレ手を合はして頼みます〳〵わいのふ。詫び言が叶はねば、引き離されたと突き詰めて、短慮な心も出しをろかと、案じ過ごして夜の目も合はず、アヽ母親はなし、たった一人。あいつを思ふおれが因果。こなたの縄目も半七が、科人になつたらなほ可愛かろ。たとへ勘当がでも、切つたが誠でも、真実親子の肉縁は、切るに切られぬ血筋の親。おれもこなたほどはなけれども、娘は可愛い。まして勘当はせぬ娘。愚痴なと人が笑はうがおりや可愛い、不憫にござる。可愛い、可愛い〳〵ござるはいのふ。コレ聞き入れてたべ半兵衛殿」

とこれまで泣かぬ宗岸が、へに堪へし溜め溜めをたくしかけたる叫び泣き。強う生まれし半兵衛も舅の心根思ひやり

「ヲヽ道理ぢや〳〵、宗岸殿」

とあとは詞もないぢやくり。妻も、お園もに、四人が涙高水に、樋の口あけしごとくなり。半兵衛やう〳〵顔を上げ

「云はねばならぬこともあれど、孝行な嫁女の手前、胸につまつて云ひにくい。ナニ宗岸殿。奥の間で云ひ明かさん。コレお園。そなたをさら〳〵嫌ふぢやない。気にかけてたもんなや。舅殿へ話すうち、しばらくこヽに」

と三人は、しを〳〵奥へ泣きに往く、心の内ぞ哀れなる

跡には園が憂き思ひ。かヽれとてしもの、世の味気なさ身一つに、結ぼれ解けぬ片糸の、繰り返したる独り言

「今頃は半七様、どこにどうしてござらうぞ。今更返らぬことながら、といふ者ないならば、舅御様もおに免じ、子までなしたる三勝殿を、とくにも呼び入れさしやんしたら、半七様の身持ちも直り御勘当もあるまいに、思へば〳〵この園が、去年の秋の煩ひに、いつそ死んでしまうたら、かうした難儀は出来まいもの。お気に入らぬと知りながら、未練な私がゆゑ。添ひ臥しは叶はずとも、お傍にゐたいと辛抱して、これまでゐたのがお身の。今の思ひにくらぶれば、一年前にこの園が死ぬる心がエヽマつかなんだ。へてたべ半七様、私やこのやうに思うてゐる」

と恨みつらみは露ほども、夫を思ふ真実心なほいや増さる憂き思ひ

**〔解　　説〕**

　正徳二年（一七一二）大坂竹本座初演。近松門左衛門の作。大坂の新町に実在した芸妓タ霧にちなんだ物語で、本来は「夕霧阿波の鳴門」という上中下三巻の世話物です。名妓と言われた夕霧の没後には、追善として数多くの芝居の作品が生み出されましたが、この作品はその中でも代表作となっています。上巻だけが独立して「廓文章」として度々上演されています。

**〔あらすじ〕**

新町の名妓夕霧と深い仲になった伊左衛門は、多額の借財を作り、親から感動され放浪の身となってしまいました。夕霧も心痛のあまり患ってしまいます。暮れの支度に華やぐ廓。吉田屋の座敷に呼ばれた夕霧は、図らずもみすぼらしい紙衣(かみこ)姿で吉田屋亭主を尋ねてきた伊左衛門と再会するのでした。しばらくぶりに逢った二人は、互いに恨み言を言い合うのですが、伊左衛門の母が勘当を解いたという知らせが届き、夕霧の病も癒えて、円満な幕引きとなります。

**吉田屋の段**

冬編笠の垢ばりて、紙子の火打膝の皿、笠ふき凌ぐ忍ぶ草、しのぶとすれどいにしえの花は嵐の頤に、けふの寒さを喰ひしばる

はみ出し鍔も神さびて鐺つまりし師走の日、胡散らしく吉田屋のうちを覗いて

「喜左衛門、宿にかちょっと逢ひたい、喜左、喜左」

と鼻に扇の横柄なり

「喜左衛門に逢ひたいと仰せあるは、どなたでござります。どなたでござる」

と笠を覗いて

「ヤアお前は伊左衛門さま」

「なんと喜左。なつかしさに逢ひに来ました」

「アヽお懐しや〳〵。京大仏、馬町に御逼塞と承はり、夕霧さまより数通の御状飛脚も二三度、エヽ奈良大津まで尋ねさせ、たった今もお噂。ガまづお馴染みの小座敷で、二年積るお物語。サア〳〵、奥へ〳〵」

と袖ひけば

「アヽコレ喜左。さりとては紙子ざはりが荒い〳〵」

引けば破れる掴めば跡にしはす浪人。昔は鑓が迎ひに出る。今はやう〳〵長刀の、草履をぬいで編笠の中の、座敷に通りける

「コレハ〳〵お珍らしや伊左衛門さま。ようこそお出でなされました。モウお噂ばかりまうし暮してをりました。ガまづ御祝儀のお盃をいたしませう」

「イヤコレ内儀。喜左衛門といひこなたといひ、昔のよしみを忘れず、ねんごろに蓬莱とまでは気がつけども、タとも霧とも得いひ出さぬ。ほのかに聞けば夕霧は、身がことを気病みにして、命危ふしと聞いたが、きつう重いか。ただしまた無常の夕霧と消え失せてしまうたか。歎きをかけまいとていひ出さぬか。アヽコレ誓文で泣くまい。サヽ語って聞かしゃ。泣かぬ〳〵」

といふ声も、気づかひ涙濁りける

「ヤこれはお道理。イヤモ夕霧さまの御気色も、秋の頃はさん〴〵で、勤めもお引きなされしが、エヽ寒に入って大きに御快気。すなわち阿波のお侍さま、正月もなさる筈で、今日は私が方へ、お出でなされてゞござります」

「ヤアそれは誠か、真実か」

「ハテ嘘か誠か隣座敷ちょっと覗いて御覧じませ」

伊左衛門『はっ』と急いたる顔色にて、しばし詞もなかりしが

「ノウ内儀。天地開き始まりてより、誠のある傾城と迦陵頻伽の雄鳥は、絵に書いたも見たものがない。総嫁のやうな傾城めに、モ微塵も心は残らねど、知ってのとほりあいつが腹から出た伜、しかも男子で明けくれば七つ。遣手の玉が才覚で、里にやったとやら。定めてやったもいつはり、捻殺してかな棄てつらう。阿波の客といふも合点。この前身どもと張合うた阿波の大尽平といふもの。アヽつら〳〵思へば傾城買より紙屑買ひがましぢゃ。サなぜといや。金出してこの方へ取るものとては状文ばかり、七百貫目が紙屑ではナ富士の山を張抜きにせうとまゝぢゃ、ハヽハヽハヽヽヽヽ。仕合せの悪い時、なんで損をせうも知れぬ。無用の涙で紙子の袖を濡らした。継目の離れぬそのさきに罷り帰らう」

「アヽもうし〳〵それはあんまり慳貪ともうすもの。まづ夕霧さまに逢はせませう」

「アヽイヤ〳〵慳貪ならば夕霧より、フン蕎麦切りにでもいたさう」

「それはあんまり御短気な。奥のお客は平さまではござりませぬ」

「アヽイヤモ平でも壺でも、この方仕度はようござる」

とすね廻る。そのうちに奥座敷には手を叩く

「アレ禿衆はどこにぞ」

といひつゝ内儀は奥座敷、亭主もなんと気の毒顔

「アヽ折角御機嫌よかったにまた例の御癇癪。たとへどのやうにお腹が立たうともこの喜左衛門に御免じなされ、なんにもおっしゃって下さりますな。あなたのことをいろいろと苦になされてのアノ大病。もしものことがあったらば、アヽまゝよ。ドリャ首尾して参りませう」

と枕当てがひ喜左衛門、心残して奥へ行く

過ぎし夜すがの連れ弾きを、思ひ出して伊左衛門、腹立ち紛れに調子さへ、あはゞどうしてかうしてと、胸は二上り三下り、今の憂身も心から、思ひ廻せば奥の間の唄の唱歌に合の手や

〽︎可愛い男に逢ふ坂の関より、つらい世の習ひ

「オヽそれよ、あの唄で思ひ出す去年の月見は奥座敷で、夜とともに飲み明かしたる大騒ぎ。太夫とおれが連れ弾きで、弾いた時の面白さ。弾くその主は変らねど、変ったはおれが身の上、あいつが心底、マあのやうにあらうとは」

〽︎思はぬ人に、せき留められて、今は野沢の一つ水

「アいかさまさうぢや、恋も誠も世にある時、人の心は飛鳥川、変るは勤めの習ひぢゃもの、オッいっそ逢はずと去んでくりょ〳〵〳〵。アイヤ〳〵〳〵、喜左衛門夫婦が志。逢はずに去んではマこの胸が」

〽︎済まぬ心の中にもしばし、思はでうつす月の影

むざんやな夕霧は、流れの昔なつかしく飛立つ心奥の間の、首尾は朽ちせね縁と縁、胸と心の相の山。間の襖の工合よく、明け暮れ恋しい夫の顔見るに嬉しく走り寄りわが身をともに裲襠に、引きまとひ寄せとんと寝て抱きしめしめ寄せ泣きけるが

「もうし伊左衛門さん。目を覚まして下さんせ。わしゃ煩うてな。モとうに死ぬるはづなれども、今日まで命ながらへしは、今一度逢はして下さんす、神仏の控へ綱。コレ懐しうはないかいな、顔は見たうはないかいな」

と揺り起し〳〵抱き起せば、取って突退け

「ヤコレそこな夕霧殿とやら夕めし殿とやら。節季師走にこなたのやうに隙ではござらぬ。七百貫目の借銭負うて夜昼稼ぐ伊左衛門。こんな時寝ねば寝られぬ。エヽ邪魔なされな総嫁殿」

ところりとこけてそら鼾

「身に覚えはなけれども、恨みがあらば聞きませう。イヤ〳〵〳〵寝さしはせぬ〳〵」

「エヽコリャなんとする。この体になっても藤屋伊左衛門。今のやうに奥座敷の客に踏まれたり蹴られたりする傾城に近附きは持たぬ。アノここな万歳傾城。万歳ならば春おぢゃ。通りゃ〳〵〳〵〳〵」

「ムウこの夕霧を万歳とはえ」

「オヽ万歳傾城の因縁知らずか。知らずば云うて聞かさう。コレ待の足にかけて蹴られるを、万歳傾城といふぞや。

〽︎誠にめでたう候ひける

しかも足駄はいて蹴るやら

〽︎年立ち帰るあしだにて、誠にめでたう候ひける

しかしなにも身すぎぢゃ。あんなよい衆には蹴られても損はいかぬ。欲も知らねば身が立たぬ

〽︎よく若に御万歳、年立ち帰るあしだにて誠にめでたう候ひける。町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、蹴る〳〵〳〵。コレ喜左。餅でも米でもはやうやって去なしゃいの」

と訳も涙の拾て詞。煙草引寄せ吹く煙管。そらさぬ体にてゐたりける。夕霧涙もろともに

「恨みられたり喞つのは、色の習ひといひながらそれは浮気な水浅葱、逢ひ染めてこひ紫とその日からこんな縁が唐にもあらうか。派手な浮名が嬉しうて、人のそしりも世の義理も、白紙に書く文の伝返事とる手も心せき、口舌の床のよしあしも、嬉しいにつけ悲しいにつれて忘れたことはない。それにお前の悪性を、わしが案じは移り気な、ほかにもしやといひがかり、背中合はして寝て見ても、ついそれなりに張弱く仲直りすりゃ、明けの鐘憎うてならぬ鳥の声、なんの烏が意地悪で鳴くぢゃなけれどきぬ〴〵の、いなせとむない心から、まゝにならぬは色の意地。広い世界に住みながら、狭う楽しむ誠と誠。それがかうじてうちかたの首尾は不首尾と結ぼふれ、勘当の身とならの葉やこの手柏の二人が中、暇乞ひさへ泣くばかり、それから絶えて音信なく、この夕霧をまだ傾城と思うてか。ほんの女夫ぢゃないかいな。明くれば私も二十二、十五の暮から逢ひかかり儲けた子さへはや七つ。誠をいはばこの頃は、一門中の状文にも『伊左衛門内より』と書いても人の咎めぬこと。私に恨みがあるならばこなさんにも恨みがある。去年の暮から丸一年、二年越しに音信なく、それは幾瀬の物案じそれゆゑにこの病。痩せ衰うたが目に見えぬか。煎薬と煉薬と針と按摩でやう〳〵と命つないでたまさかに逢うてこなんに甘ようと、思ふところを逆様な、コリャむごらしいマどうぞいの。私が心が変ったら踏んでばっかり置かんすか。叩いて腹がいるかいな。コレ死にかゝってゐる夕霧ぢゃ。笑ひ顔見せて下さんせ。エヽエヽ心づよや胴慾な、憎や」

と膝に引寄せて恨みつ泣いつ声をあげ、空に知られぬ袖の雨、隈なき夜半の月影も曇るばかりに見えにけり

かゝるところへ下女はした、遺手、禿に、女房も

きほひかゝって喜左衛門

「もうし〳〵伊左衛門さま。もうし〳〵伊左衛門さま。お前の親御妙順さまよりお人が参り、御子息さまも母屋へ引取りあなたも御勘気赦りました」

「ほんにそれいな太夫さん。お前も身請の埒が明き、大てい嬉しいことぢゃない」

「オヽ〳〵この喜左衛門が精力で、本復さして見せませう」

と家内が勇む勢ひに、つれて本復伊左衛門悦びの、眉を開くや扇屋夕霧、名を万代の春の花。見る人、袖をぞつらねける